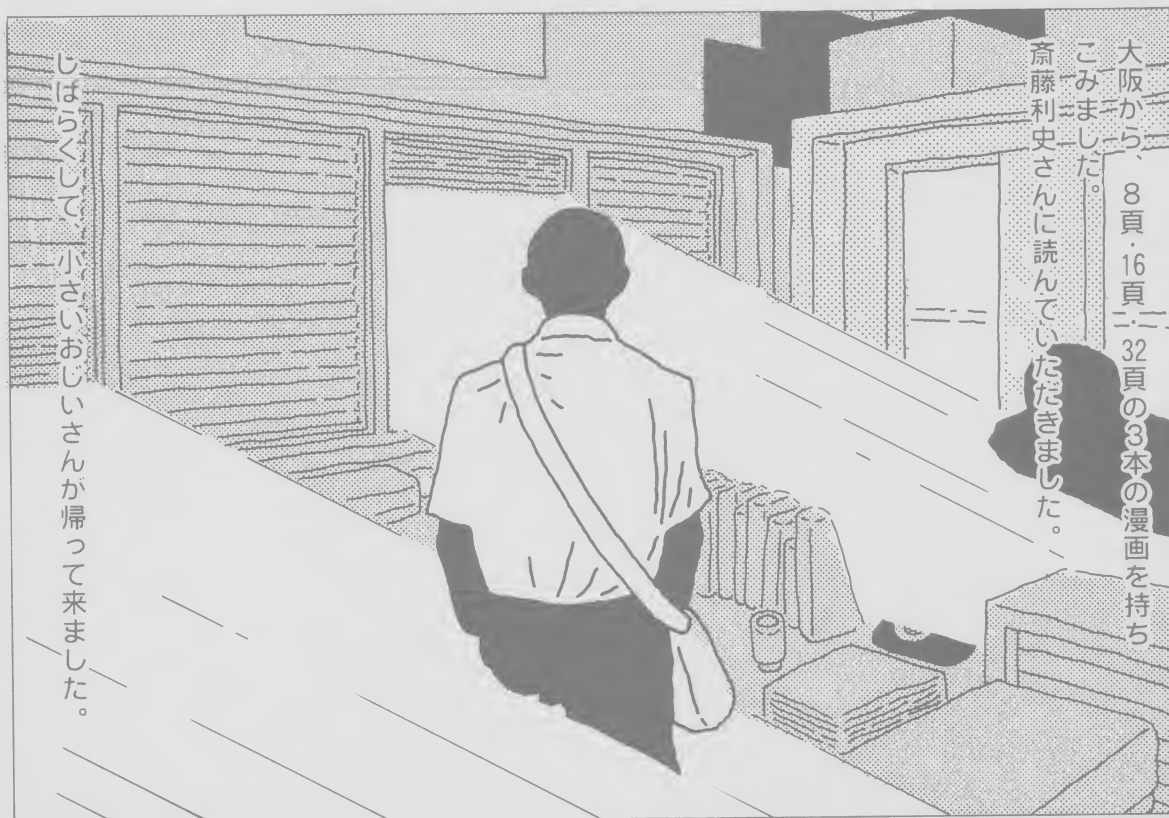
長井さんにお会いしたときのこと

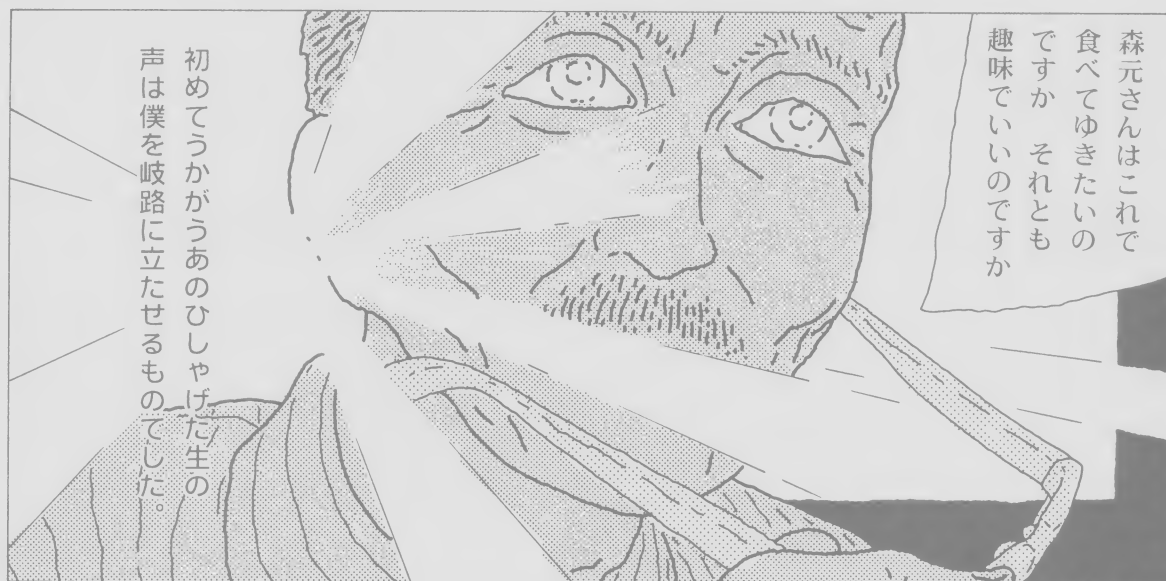
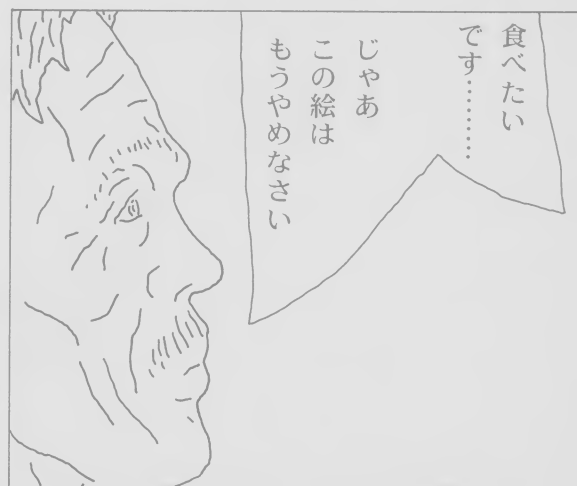
森元暢之

一九八二年の夏の終わりにその材木屋さんの二階を
訪ねました。
僕は21歳でした。

堂

大阪から、8頁・16頁・32頁の3本の漫画を持ち
こみました。
斎藤利史さんに読んでいただきました。

しばらくして、小さいおじいさんが帰って来ました。

座ったかと思うと無言で一気に合計
56頁を読んでいかれました。
永い一瞬でした。
………

森元さんはこれで
食べてゆきたいの
ですか　それとも
趣味でいいのですか
初めてうかがうあのひしゃげた生の
声は僕を岐路に立たせるものでした。

食べたい
です………
じゃあ
この絵は
もうやめなさい

当時は丸ペンで中途半端な
絵を描いていました。
いきなり新人が
こんな絵を読者に
見せても　読んで
もらえないから

あなたの漫画は8割くらい
自分のために描いているん
です　でもせめて半分の
5割は読者のことを
考えないとだめなんだ

せっかく描いたって
読んでもらえないよ
わかりやすさとゆう
のは　とても大切
なんです
あの………
この絵をやめて
どうしたら
——？
僕は途方にくれ
ました。

ひさうちみちおさんの漫画
を知っていますか？あの
人のマネをしなさい！
ひさうちさんの作品がどう
してたくさんの人に受け入れ
られているのかよく考えて！
あの………の
マネというのは
どこを………？

全部です！
現在思い返すと、しごく具体的な
アドバイスをいただいたのですが
僕はどんどん途方にくれました。

亡羊としていると、帰りの
新幹線で読んだらいい
からと、やまだ紫先生と
杉浦日向子先生の本をくだ
さいました。
この2つだけ
(8頁と32頁)
おあずかり
します。

2ヵ月後、8頁の漫画が「入選作品」となった『ガロ』が届き、とんでもない嬉しさと不安に包まれました。

そして、今までの絵を捨てるよう助言を受けて動揺するほど大したモノなど本当は持っていなかったのだ、ということを模写するうちに知らされました。

ごはんを作ったり茶碗を洗ったりしながら すぐ机に向かって描けますか?
力を入れるのは4ページごとでいいんだよ
1ページは3段か4段に割って――
基本だからね―
後年、1通だけお手紙をいただきました。とにかく無理でも続けて描くようにとの励ましでした。

なんとか続けていられるのはあのとき拾ってくださったからです。
それからずっと、漫画の5割は長井さんの眼を意識していると思います。
だからもっと見ていただきたかったです。
ありがとうございました。
ゆっくりとお休みください。

一九九六年二月十八日